



野戦兵器廠の壕が構築された丘。現在の翔南小学校一帯。左は黄金森。

(南風原町教育委員会からの提供写真)

明し、召集対象でないので、帰ろうとすると、「員数だから残っておれ」といわれ、やむなくそのまま行動を共にすることになりました。

また年限である四十五歳を越えた人達が四名いました。恩納村出身戦死者のおひとりである、當眞嗣政さんは召集日からあと五日で誕生日を迎え、四十五歳の年齢を超えることになりました。嗣政さんの配偶者、當眞カメさんは出先の帰り、嗣政さんが防衛召集を受けたことを聞き、集合場所の恩納校へ向かいました。カメさんの手記が残されています。

「私たちは、これからの家族の暮らしや、軍隊の経験のない夫の事などについて立ち話をした。五人の子供を抱え、妊娠している妻の今後について夫は心配していた。三月には満四十五歳になるので、兵役は満期になるから、除隊できるだろうとも言っていた。この様な家庭事情を考え、召集免除を願い出ようと話している時に、全員集合の鐘が鳴り、二人は分かれなければならなかった。これが夫との最後の別れとなった」(『恩納村民の戦時物語』)

大切な人との別れを惜しむ間もなく、家族の

ことを心配しながら、後ろ髪を引かれる思いであわただしく出発した様子がかがえます。

召集規則の年齢範囲から外れながら、召集された人たちがいたことは恩納村だけでなく、他の地域でもみられました。召集規則にもとづいた運用、正規の手続きを経ず召集が行われたと考えられます。(瀬戸)

(訂正) 二〇二七年九月号で第三十二野戦兵器廠留守名簿の恩納村出身者の人数を四二名と紹介していましたが、一四三名に訂正します。

《参考文献》

- ◆ 『恩納村民の戦時物語』 恩納村遺族会 (二〇〇三)
- ◆ 『第三十二野戦兵器廠 球二八八二部隊 留守名簿』 (厚生省援護局調査課 一九七七年調製)
- ◆ 『沖縄県史』 資料編二十三 沖縄戦日本軍史料 沖縄戦六 (二〇三)
- ◆ 「戦世の南風原―語るのこすつなぐ―」 (二〇一三)